

「お能の名人 能楽堂金剛流二十六世宗家 金剛永謹先生に聞く」

聞き手：徳川美術館学芸部マネージャー 並木昌史先生

日時：2023年5月27日

場所：名古屋能楽堂

【並木】 皆様こんにちは。きょうは、「お父様の愛した物」というプログラムで、金剛流家元第二十六代宗家でいらっしゃる金剛永謹先生を京都からお迎えして、お話を30分ほど伺いたいと思います。

また、このお話の中で、きょうは先生が貴重なお品をお持ちくださいました。これを解説つきで見せていただくという催しでございます。

私は徳川美術館の学芸員で並木昌史と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

徳川美術館は、名古屋市東区にあります私立の美術館で、かつて名古屋城を拠点としておりました大名家の尾張徳川家が伝えてまいりました宝物を所蔵しております美術館でございます。

きょうのお話ですけれども、能のシテ方が五流ございますけれども、金剛流は京都を拠点として活躍しておられたご流儀です。金剛流のお能は京都御所に出仕しておられたという由緒から、雅で華やかであるというふうに表示されます。「舞金剛」とか、あるいはきょうのお話と関係がありますが、「表金剛」とも呼ばれております。

本日は、先生からお流儀についてもご紹介いただきまして、またお持ちいただきました豊臣秀吉ゆかりの面について伺いしていきたいと思います。

金剛永謹先生のプロフィールを簡単にご紹介したいと思います。

先生は、金剛流二十五代宗家の二世、金剛 巖先生のご長男として、昭和26年、1951年のご誕生で、5歳のときに初舞台を踏まれ、以後、数々の賞を受賞され、平成11年に二十六代宗家とされました。

また、きょうお集まりの皆様の中には、平成16年に京都御所の横に完成した金剛能楽堂にお運びになられた方も大勢お見えかと思えます。

先生は先日、奈良の興福寺の薪能にもご出演なられたということですが、名古屋での公演は年にどれぐらいの頻度でお越しでしょうか。

【金剛】 名古屋は、年に一度か二度ぐらいですね。

【並木】 先生のほうから、金剛流についてお流儀の特徴を伺えたらと思います。

【金剛】 今ご紹介いただきましたように、昔から“謡宝生”、“舞金剛”と言われ

ておりますが、舞を特徴としている、五流の中でも動きの多い流派でございます。

今ご紹介いただきましたように京都でやっておりますけれども、もともとは奈良の興福寺の「猿楽」ですけれども、法隆寺が発祥の地でございます。その後、春日大社、興福寺で集まって「大和猿楽」、今は五流ありますけれども、このうちの観世、宝生、金春、金剛の4つが「大和猿楽」と呼ばれる流派で、それが春日興福寺の薪能に出勤する座でございました。

その薪能も、もう先年から続いておりますが、先日、奈良の興福寺で出演させていただきました。

【並木】 金剛流は京都を拠点に活躍されているのですけれども、実は江戸時代から名古屋とのご縁があります。

大名家の尾張徳川家でも金剛流を学ぶ家臣がおりました。有名なのが加賀宝生のように、一つのご流儀を大名家も家臣も一緒に学んで盛んになったということがありますが、金剛流ですと、米沢の上杉家が盛んにやられました。

実は名古屋の尾張徳川家でも、6代徳川継友の江戸時代中期のころに、在郷の寺田佐平次(サヘイジ)という家臣が尾張のお抱えになって、そして金剛流とのご縁ができたということです。

【金剛】 寺田家は名古屋の尾張家の金剛流の役者ですけれども、尾張徳川家は金剛一流ということではなく、何流か入っていますよね。そのうちの一つに金剛流が入っていて、寺田家がお能をしておりました。

私の家も、もともとは野村という家で御所のお能でして、宗家は徳川本家の江戸のお抱えで、これは能楽シテ方全部、観世、宝生、金春、金剛、喜多と、宗家はみな江戸幕府お抱えです。

その中の私の家は、途中から金剛という名前をもらって分家みたいになったのですけれども、寺田家だけはこちらの名古屋でずっと金剛流をさせていただきました。

【並木】 尾張徳川家は、実は初代義直の時代は金春でして、3代綱誠(ツナリ)の時代に宝生が入ってきます。これは、5代将軍綱吉が宝生流の大変熱狂的な愛好者であったということで、そしてその後、金剛流が入り、江戸時代の終わりのころに観世が入ってきます。それと、幕末近くにまた宝生が入ってくるのですね。これが11代将軍家斉の好みであったということです。

ですから、喜多以外の四流が尾張徳川家に入っているということで、実はこれの大変わかりやすい証拠になるものがございます。

私どもの美術館に若い女性専門の能面があります。観世が「若女」、宝生が「節木増(フシヅウリ)」、そして金春と喜多が「小面(コモテ)」、そして金剛流の「孫二郎」。

実は私どもの美術館にその4つの面が全部揃っているのです。ですから、これが

証拠だという証でもございます。

きょうお持ちいただきましたのが、「雪の小面」という能面でございます。

それでは、「雪の小面」のお話をお願いしたいと思います。

【金剛】 豊臣秀吉がわりと晩年に能を好きになって、一生懸命お能の稽古をしたり、自分で知られていないような能もつくったりして、“太閤能”と呼んでいますけれども、能に親しんでおられた。

何流かという、豊臣秀吉は金春流を習いました。師匠は暮松新九郎という役者です。当時の金春流の家元、太夫は金春岬連(ギョウリン)という人ですけれども、実際には暮松新九郎という役者から習っております。

徳川さんは古くから観世なんですよね。これは多分、今川のところに徳川さんがいらっしやって、その時期に能の家元たちも、太夫たちも、戦国時代ですのでみんな自分の関係のある大名を頼って行っております。観世様は今川さんを頼って行っていたようで、そこで徳川家康公と観世家とのつながりができたようでございます。

そういうことで徳川家は観世ですけれども、豊臣秀吉は金春をなさっております。そして、能にいろいろ興味を持ってこられると、やっぱり面にも興味を持たれまして、面を随分集められたのですね。

最初は、豊臣秀次に命令して能面を集めたという記録が残っております。これは秀次が下島(シモウジ)に越前まで行って集めてこいと言って、100面ぐらい集めてきたみたいです。その中にあったのか、あるいは別系統で入ってきたのかわかりませんが、金春流は女の面は「小面」です。結局「小面」が3つ集まってきたのです。それで秀吉は「雪・月・花」と名をつけて大事にされておりました。

その3面を最終的にはいろいろな方に与えられるのです。「雪の小面」は自分の能を稽古していた金春太夫に与え、「月の小面」は徳川家康がもらったということになっております。「花の小面」は当時の金剛太夫がもらったわけです。

これが金春太夫のもらった「雪の小面」で、今、私の家に来ております。

「月の小面」は現在行方不明というか、江戸城で火災に遇ったとも言われておりますのでもうないのかもわかりませんが、「雪」と「花」は現存しております。「花の小面」は財閥の三井家に入りまして、現在、三井記念美術館にございます。

【並木】 こちらの面ですけれども、作者が龍右衛門(タツエモン)、世阿弥の談話を息子の元能(モトツネ)が書いた「申楽(サカガキ)談儀」に出てきております。この龍右衛門さんが3面作った。

【金剛】 「雪・月・花」三面とも龍右衛門さんが作ったと言われております。

【並木】 こちらの面ですが、なかなか拝見する機会がございませんけれども、若

い女性をモデルにしたもので、本当に少女ですね。

【金剛】 女面ですよ。金春と喜多が女の能で使います。金剛家ですと「孫二郎」を使うのですけれども、金剛流は「孫二郎」と併用になっています。

【並木】 こちらの「小面」ですけれども、なかなか今、舞台上で実際にこれをおかけになる機会は少ないですか。

【金剛】 そうですね、でも年に2回ぐらいはかけておりますね。

【並木】 大変華奢なお品で、きれいな状態で保っていくのもなかなか難しいことでございますね。

【金剛】 そうですね。結構、能面は修理をして伝えております、やはり痛みますので。

「小面」だけが造形が子ども顔なのです。あとの女面はだんだん大人の顔になっていますけれども、「小面」だけは鼻のあたりを中心にして、目尻を半径にして円を描くと、口がその円内に入ってきます。

「若女」、「節木増」、「孫二郎」はその円から口が出ますが、その円内に口が入るのは子どもの顔なのです。ですから、若い女性につくってあるけれども、造形的には子どもの造形でつくられている女面です。

お能の面というのは左右対称ではないのです。陰と陽を持っておりまして、左右同じようにはつくらないで、ちょっとつくりかえます。これは室町中期からもうそのようになっております。それがあるので、少し陰の表情になったり、あるいは少し明るめの表情になったりするの、この陰陽が面にあるからです。

【並木】 このほか金剛流でお使いになる「孫二郎」、これもなかなか素敵なお話が残っているとのことですね。

【金剛】 「孫二郎」は金剛孫太郎だと思っておりますが、奥さんが早く亡くなったので、その奥さんの面影を能面にしたのが“面影”と呼ばれる「孫二郎」です。それ以来、金剛流ではその「孫二郎」という面を大事に使っております。

【並木】 「小面」よりは若干、年上の設定ということで。

【金剛】 そうです、「若女」とか「節木増」と同じような年齢になっております。

【並木】 今回、皆様お持ちのフリーペーパーのほうにも徳川家康のお話がいろいろ書いてありますし、きょうこの後、『百万』と『八島』の実演もありますけれども、私どもの徳川美術館にもかつて家康が持っていたらしいという面が、息子の義直のところに伝わっていたようなのです。現在、これが徳川家康から伝わったと明らかに証明できるものは実はないのです。

「月の小面」は、きっと二代秀忠の江戸城のほうに行ってしまったと思うのですけれども、江戸時代の終わりのころに尾張徳川家の中で、このお面が家康ゆかりのものではないかと書き上げたリストがあります。「似寄品」といっております。そ

ういうもので、現在9点ほどがもしかしたら家康まで遡るものではないかと言われております。

尾張徳川家の能面とといいますと、明治以降、何人かの有識者の方に見ていただいたのですけれども、そのお一人に、今日の金剛先生の曾祖父にあられる謹之助先生もごらんになっていらっしゃいます。

謹之助先生が明治44年、1911年の4月に大体150面以上あります尾張徳川家伝来の能面を一通りごらんいただいたようでして、そのときの謹之輔先生の所見が実は書き残されております。

また、その中の特に優れている17面につきましては、謹之輔先生の鑑定書が残っていきまして、文言を読みますと、「お大切にご保護希望し奉り候」と書いてございます。「雪の小面」を見出して、金剛家の蔵品に加えられた謹之輔先生ならではのお仕事ではないかと思えます。

「雪の小面」のお話に戻りますけれども、来年の1月に実際の舞台でお使いになるとのことですね。

【金剛】 「雪の小面」は去年も国立能楽堂で使っているのです。私どもの流儀では『泰山府君(タイフク)』とありますが、観世流では『泰山木(タイフク)』と呼んでおられます曲を、観世の宗家と一緒にさせていただいたのです。

そのときに、天女のほうを観世宗家がされたのでこの「雪の小面」をかけられました。そして私は観世宗家が持つておられる有名な「小娘」をかけて『泰山府君』をさせていただきました。

最近では、この面を使ったのは、古くから上演していた『薄(ススキ)』というのが金剛流にありまして、それを数年前から数回やっているのですけれども、そのときにこの「雪の小面」をかけております。

【並木】 『泰山府君』は金剛流の独自の曲ですか。

【金剛】 天野先生にちょっと調べていただいたのですけれども、江戸時代初期ぐらいに“上掛り(カガカリ)”の本もありますから、別に金剛流だけがやっていたのけではなくて、上掛り系を観世とか宝生もやっていた曲らしいのですが、最終的には金剛流に残って、その金剛流も上演しなくなって随分長く開いている曲でしたね。

【並木】 桜の命が延びるようにと祈ったという桜町中納言の伝説を踏まえた曲ですね。そういうときになかなかぴったりの面ではないかなと思います。

【金剛】 私どもの能楽堂が二十周年記念で、来年京都で、観世宗家に来ていただいて『泰山府君』をやりますので、またかけていただくのではないかと思います。

【並木】 大変楽しみですですね。

【金剛】 明治44年、謹之輔がこちらの徳川さんの面を鑑定させていただいたことですのでけれども、謹之輔は大変能面に興味を持ちまして、私の家にあります

面のかかなりの部分、謹之輔が集めたものでございます。

この「雪の面」にしましても、もともと江戸時代の終わりまでは金春家のものだったのですけれども、明治維新になって世の中が大変で、金春家から出たのが私どもものほうに入ったのです。謹之輔が買うぐらいの値段ではなかったみたいですが、高く高かったそうです。大阪に千草屋さんという金剛流の免許皆伝のお金持ちがいて、その平瀬露香(ロウ)という人が買って、うちのほうへ入れてくれたようですね。

その時期に謹之輔は、これも金春家の面らしいのですが、「翁」を見つけているのですよ。ただ、それは高かったので買えなかったという記録を残しております。

ですから、今、金剛流の中で謹之輔はその能面を集めてくれまして、私どもの持っている能面のかかなりの部分、謹之輔の収集した面でございます。

【並木】 旧家がそういう古い面とか装束をお売りに出した時代にぱっと見つけて、謹之輔先生は大変目利きでいらっしゃって、金剛家にお伝えになられたということですね。

【金剛】 これは謹之輔が能面に興味を持って集め始めたいわれが一つありまして、それは明治の初めごろだと思うのですけれども、アメリカとかヨーロッパとか、外国からいろいろな日本の美術品を集めに来ていたのです。その人たちから頼まれて、能面を集めてくれと言われたそうです。それで、京都の骨董屋さんに声をかけたらすぐに 100 面ぐらい集まってきたのだそうです。その中に 1 面だけ、すごく気にかかる面があった。でも謹之助は潔癖症で、頼まれたものから一面引き抜くことはしないで、全部渡したのだそうです。

その後、東京へ来たときに、あるご挨拶に行った能のお家で、「最近いいものを手に入れたからごらんになりますか」と言われて、見たらその面だったのです。そのときに、これはやっぱり自分が買っておくべきだったと思ったと書いております。それから、一生懸命能面を収集し始めたということだそうです。

【並木】 謹之輔先生は大変器用でいらっしゃったと聞いておりまして、実際に面も作られた。

【金剛】 自分でも作れるのです。私の家に謹之輔作の能面が残っております。

【並木】 それと、字もお書きになる。

【金剛】 絵も描いていまして、器用な人でしたね。小道具の羯鼓(カゴ)とかも作ったそうです。

【並木】 そうですか。ですから、やはり明治のころからそういうものを集めて、またご自分でも作って財産にされたということですね。

そういうことで、江戸時代以来の伝統が、またさらに近代以降までつながっていたということですね。

【金剛】 そうですね。

【並木】 きょうこちらの面を拝見するにつきましても、ぜひそういったことも思い出していただけたらいいなと思います。

こちらですが、ぜひ心目でしっかりと焼きつけて見ていただきたいと思います。

【金剛】 この「雪の小面」は、「雪・月・花」の中でも一番有名なのです。江戸時代にたくさん「小面」を江戸時代の作者が作ったのですけれども、それのお手本になっているのがこの「雪の小面」です。

【並木】 いろいろ面のお話とか、お流儀のお話とか、先生の今後のご予定の話なども伺いたいのでは山々ですけれども、きょうはこのあたりでお話を終わりにさせていただきます。

先生、京都からお越しくさいますてありがとうございます。

【金剛】 どうもありがとうございました。(拍手)